国際シンポジウム三

《講演録》日本神話の伝え方、そして何を伝えるか

シャロンドン・エミリア

私は日本神話に憧れに近い魅力を感じている。その魅力を皆に伝えたい。しかし、その伝え方はどうあるべきなのだろう。今、小学校で『古事記』が教えられているが、現存している史料で語られている神話は実に多様である。にも拘わらず、『古事記』だけを「教える」ということに疑問を感じる。より正確にいえば、日本に限らず、「神話」というものを義務教育の中で「教える」ということ、そして、数多ある史料の中から一つの神話だけが恰も定説であるかのように、ある神話だけを「教える」ということに疑問を感じている。ヨーロッパの文学や文化における数多くの表現や象徴を理解するために、ギリシャ神話やローマ神話を理解しておく必要があるが、これらの神話は多くの史料を基に作り出された物語により紹介されるのである。

以下に、日本神話が国際的なコンテクストの中においてどのような意味があるかということを考察し、子供にこれらの神話を伝える方法を提案してみたい。

1. 神話というもの

日本神話の主な史料である『古事記』、『日本書紀』、『風土記』は八世紀に編纂され、世界的に見ても極めて古い。その中で、他の神話には見られないほど古い神話が語られており、これらは世界的に見ても極めて貴重なものである。しかし、神話を研究することと神話を伝えることとは少し意味合いが違うものである。その違いは神話の役割から生じるので、最初に神話の役割を確認し、その後で神話を伝える方法を考える必要があると思われる。

そこで、まずは神話の政治性に注目してみたい。政治性は、日本神話についてよく話題にされるが、それは日本に限定することなく神話一般の特徴である。

『サピエンス全史』[1]の中で、イスラエルの歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリは、神話は数多くの人間が共に行動することを可能にする抽象的な考え方の極めて重要な産物であると述べている。人々が協力するためには信頼が必要であり、信頼は目には見えない同一の抽象的なものを信じることによって醸成される。例えば、食べ物や家を、食べることもできず家を作ることもできない「お金」と交換することができるのは、皆が「お金」という抽象的なものの価値を信じるからである。ハラリ氏によれば、これも神話的な考え方の一つの事例で、人間が国家というものを作り上げたのも、全ての国民が一つの超越的な権威というものを信じたからであろう。

つまり、神話の観念的な体系が国家というものを定める基盤の一つであった。このような観念の体系を確立するまで至った抽象的な考え方を発展させたサピエンスは、動物や原始人では考えられない規模の数で協力し合い、動物や原始人では想像もできない事物を作り出した。

このようにして、日本神話だけではなく、神話そのものが政治につながっていると言える。ケルト神話も王者の話であるし、エジプト神話もファラオの出自と王国のありように正当性を与えようとしている。時代の要請に応じ、新しく入って来た外来の知識や考え方の変化に応じて過去の神話が作り変えられたということも、世界中の神話に一般的にみられるものである。『古事記』についても、数多の過去の伝承を、天武天皇を頂点とする国家の正当性を確かなものにするため必要に応じて編纂された物語なのである。

ところで、抽象的な思想に生まれ社会の基となった神話は、あるグループの人々により別のグループの人々を操るようにも使われ、イデオロギーにもつながる。このような例は世界各地の神話に数多くみることができる。太古の神話を伝えるに当たって、将来、このようなことが起きることを避けるため、伝え方を考える必要がある。

次に注目したいのは、神話は、民話や伝説のように囲炉端で子供に語られたものではなく、特別な状況で成人として認められた若者に語られたものであるということだ。つまり、国家の安定につながる神話は極めて特別な物語であるということである。日本では、それらが記録されるまで口頭で伝えられてきた古代神話は、よく民話や伝説と同一視される。確かに神話の中で語られる物語は、他の伝承の中で語られる物語と同じ構造を持っている。しかし、神話が口頭によって伝えられた時代は、民話や伝説が口頭で伝えられた時代よりはるかに遠いということを忘れてはならない。神話というものが、民話のように人々が生き延びるための知恵と道徳を伝えるかといえばそうでもない。まして、遊びや気晴らしのために作り出された物語でもない。伝説のように、特定の場所や出来事、あるいは人物についてのみ語られている物語でもありはしない。

神話は物語の集合体であり、多くの物語が繋がって一つの物語になっていることに意味がある。このような神話の

体系性にも注目したい。マイケル・ウイッツェルというハーバード大学の教授は、世界の様々な神話を比較し、それぞれの物語が同じような一定の構造を持ち、似たような出来事を取り上げていると『世界の神話の起源』[2]の中で述べている。最初に宇宙や世界の始まりを説き、神々の出現や神々の出現による世界のありようと続き、次に王者の出現や人間と人間の間と神々と神々の間の争いについて述べ、最後に世界の終末を引き起こす洪水または戦争で終わる物語となっている。興味深いことに、このような物語の流れはどの国の神話においてもほとんど同じだと言うのだ。『古事記』も『日本書紀』この構造から大きく外れているものではない。

そこで話題にしたいもう一つの点は、史料の問題である。太古の神話は長期間にわたって口頭で伝えられてきたが、ある時期になって文字によって書付けられた。すると、歴史の記録に様々な説があるのと同じように、記された神話に異なった物語ができた。そして時代時代の要請により、それらの物語の中のいずれかが重要視され、それと異なった物語は偽りの物語とされるという運命を辿った。しかし、現代の私たちは、どの古い記録においても当初から残されている部分とその後の様々な時代に書き加えられた部分があることを知っている。つまり、ある史料を完全に正しいものとし、他の史料を完全に否定することはできないのだ。メソポタミアで初めて記録されたシュメールの神話でさえ、粘土板に記録されるまでの長い間ずっと口頭で伝承されてきたものであり、それらが当初の形のまま記録されたとは思えない。十三世紀に至るまで記録として残されることのなかった北欧の神話は『エッダ』として知られているが、『エッダ』にはアイスランドの詩人スノッリ・ストゥルルソンが記した詩の教本『新エッダ』[3]と、同じ時代に編集されたものではあるものの、誰が記したか分からない古ノルド語の詩集の『古エッダ』[4]という二種類の書物がある。これらの『エッダ』はともに北欧神話を取り上げてはいるが、現在、私たちが知っている北欧神話が成立す

るには、これらの二つの『エッダ』と他の古い物語が一緒になって一つの物語になっている。

時代により神々の意味が変容されて史料に違いができる例はエジプト神話にも多数ある。エジプトの太陽神ラ（ラー＝太陽）は天空の神ホルスと似ているところもあり、時には二神が一体とされた。また、ラ神は新王国（紀元前１５７０年頃―１０７０年頃）に重要な神となったアムン神と一体化し「アムン・ラー」として主神とされた。それぞれの時代の信仰（それは国民の信仰ではなく、どちらかといえば王者の信仰と信じさせたいことである）により、神々の意味が異なってきた例の一つである。

世界の神話はこのように歴史的に解釈され、神話の史料として分析され、太古の昔を垣間見せてくれる窓となっている。しかし、日本神話が話題として取り上げられると、『日本書紀』に対して『古事記』がより親しみやすいとしばしば指摘される。『日本書紀』が歴史書（それに「正史」）として書かれて複数の異伝を含むのに対し、『古事記』は一貫した筋が通っているという理由からである。『古事記』によればアマテラス、ツクヨミ、スサノヲはイザナギの禊から現れるのに対して、『日本書紀』の本文では、イザナギとイザナミによって生まれることになっている。どちらの話を選ぶかということを、どのような基準で決めればいいのだろうか。『古事記』の説を選ぶ理由として、『古事記』の物語が一貫しているという理由として十分だろうか。日本神話を教えるとき史料の差により生じた物語のバラエティを教えなければならないと思われる。

最後に注目したいことは、神話と宗教の間の深い関係である。伝説はただの言い伝えとして受け入れられて、それを信じるかどうかは重要ではない。しかし、神話は、これを信じる人と信じない人のグループに分かれる。小学校で英語を教えたとき、次のような経験をしたことがある。クリスマスの時期に、教科書通り「クリスマス・ツリー」や

「ベル」や「スター」などクリスマスの単語を教えジングルベルを歌った。すると、授業の後、一人の子供が近づいてきて困惑した顔で「先生、クリスマスはイエスさまの誕生日でしょ」と言った。特定の宗教がある家に育つ子供もいることを意識せずに神話（この場合はサンタクロースの神話）を教えれば、子供をこのように戸惑わせることもあろう。あのとき私は意識せずサンタクロースの神話を教え、イエスの誕生というその時期と関係のあるもう一つの神話に触れることはなかったから、キリスト教を信じる家庭の子供は訳が分からなくなってしまっていた。日本神話も神道につながっているので、うまく伝えなければ宗教心の強い家庭の子供が困惑する可能性を考える必要があると思われる。

2. 子供に神話を伝える方法

『ホモ・デウス』[5]というもう一つの興味深い著書で、ユヴァル・ノア・ハラリは次のように述べている。歴史を学んで歴史について知識を広げることは、同じことをするためではなく、以前の人間の経験に学んで別の道を探すためであると。神話についても同じことが言えるのではないだろうか。神話を学んだり読んだりすることは、信仰を続けるためではない。そこに表現されている考え方を理解することによって、現代人としての自分の考え方を育むためである。「教え」なくても、子供に自国や他国の神話をある形で伝えることには大きな意味があるに違いない。問題は、大人のために生まれた太古の話を、昔のことも現代社会のこともよく分からない子供にどのようにして伝えるかということである。

一つの方法は、現代の価値観に応じて神話を伝えるという形であろう。ハワイ神話を使った『モアナ』やアイルランド神話を使った『ソング・オブ・ザ・シー』というアニメーション長編、そして人気を集めた小説『ハリー・ポッター』はその方法の優れた例である。このような作品を作るとき、一つの史料に限らず様々な史料を同時に使う自由が必要であろう。研究において史料の区別がより重要であることは言うまでもないが、専門家でない人に神話を伝える時に一つの史料に限定することは、それ自体がイデオロギーになってしまう恐れがある。一つの国の神話に限らないことも、いいのかも知れない。『ハリー・ポッター』では、北欧神話の巨人も、ギリシャ神話のケンタウルスも、ケルト神話の魔法の杖も、はたまた日本神話のカッパまでもが出てくるのだ。子供たちにも通じるこのような新しい形で神話の物語を語ると、それを遊びの一種として理解することができるだろう。ちなみに、『ハリー・ポッター』を書いたJ・K・ローリングは大の神話好きで神話をよく知っている人なので、自分の想像だけで『ハリー・ポッター』を書き上げたのではなく、自らの想像の中にその知識を折り込んだのである。

全ての史料を自由に使って様々な話を作り出すことは、過去のイデオロギー的、宗教的な意味合いから離れ、子供が気楽に神話を自分のものにすることを可能にする。その一つの例は上述のクリスマスの神話であろう。サンタさんのイメージが時代により様々に解釈されて現在の憧れのイメージに至ったことは、その背景にある「信仰」という箍（たが）が外されて、子供に愛される物語に変容したからであるに違いない。ちなみに、子供向けではなく、また神話として読むものではないが、芥川龍之介の『老いたる素戔嗚尊』も、このように神話を自由に解釈した作品の素晴らしい例である。神話のイメージを損なうことなく、その基となった神話の筋立てもよく紹介している作品である。

もう一つの方法として、比較の形で日本神話を世界の神話と同時に紹介することもできる。インターネットのおか

げで情報が世界中を飛び回っているが、昔も、速度が少し違ったけれど、世界各国の思想が世界中を飛び回っていた。様々な思想や知恵が伝わり融合することによって、人間がここまで進歩してきたのである。世界が共有すべき過去の知恵という形で、様々な日本神話を世界神話とともに伝えることができるかも知れない。例えば、クリスマスの英単語を教えるとき、日本のお正月の単語もキリスト教の神話の単語も同時に教えることをお勧めしたい。あるいは、オオクニヌシと因幡の白兎の話を伝えるとき、他国の似たような話をともに語れば、子供たちが自分の国を世界の中でどう位置付けるかに役立つだろう。

3. 現代に応じた古代神話の伝え方

各史料に特徴があり研究の際にそれぞれの史料の原文を理解することは極めて重要だが、神々や神話を分析するとき専門家たちは全ての史料から得られる情報を使っている。例えば、ある神の性格について論じるとき、同じ学術論文では『古事記』の記述も『日本書紀』の諸一書も『風土記』の様々な話も取り上げる。しかし、現代語訳や意訳が『古事記』にだけしかないので、一般の人は『日本書紀』や『風土記』を気楽に読むことはできない。一般の人には、読み難いそれぞれの史料ではなく、読む気持ちにさせる一つの物語が必要だろう。ギリシャ神話やローマ神話はいうまでもなく、ケルト神話[6]や北欧神話[7]にもこのような物語があり、数多くの史料の上に成り立ったこれらの物語は、研究者や作家によって一般の人が読みたくてたまらなくなるほどの物語としてまとめられている。ケビン・クロスリー＝ホランドの『北欧神話』ではそれぞれの話の出典に基づいた注釈が付けられており、その注釈は厳密な研究には引

用できないが、ちょっとした研究には極めて有用なものとなっている。少し長い引用ではあるが、言いたいこととあまりに一致しているので、以下に、古代史料を総合的に使って神話物語を作成する必要についてクロスリー＝ホランド氏の説明を述べよう。

…どの直接的な翻訳も、どれだけそれが優秀だろうと、また詩の形をとっていようと散文であろうと、北欧神話を広い聴衆に、それがよく値するほどに訴えかける形式で提供することは望めない。多様な断片的資料、圧縮、また読者の側における相当な知識の仮定が、かなり障害になる。にも拘らず、根本資料の多くが熱中的な読みを引き起こすし、またそれを楽しむには専門家たるを必要としない。翻訳のいくつかは参考文献の中にあげておいた。そこで、私はこの神話を新しい版で語り直し、またそれがオリジナルの再現であると共に、それ自体で十分に血の通ったものであることを期した。私はエッダ詩やスノリや他の適当な資料に現れている何らか重要なものを何ひとつ略さなかったが、暗示されたものを展開させたり、ドラマチックな状況を肉付けしたり、ちょっとした対話を加えることは、躊躇しなかった。わけても私は、すべてが世界樹ユグドラシルで結ばれている九つの世界に、山や平原や川や館や宮殿をもった、若干の叙述的背景を提供すべくつとめた――もとの聴衆は自明のこととしていたであろうこの神話の地理的装置を。そうする際に、私は（スノリ・ストルルソンと同様に）正式に『グリームニルの歌』と『ヴァフスルードニルの歌』と『巫女の予言』を土台に、また自身のアイスランドの観察に基づいて描いた。どこでもそれができた場合には、私はアングロ・サクソンの語根をもつ、より直截な言葉を用いるのが良いことを発見した。一つの神話と他のそれとの語調の差は意識的にやったもので、さまざまな原典の異なった声調を反映するものである。[8]

日本神話についてもこのようなことが言える。物語があれば一般の人に興味深く読まれ親しまれるに違いない。『古事記』の神話だけに基づいた物語は物足らず偏っているもので、日本神話の豊かさを感じさせることができない。日本でも海外でも、古代神話の記録は「歴史」と同時に文学として著されている。その文学性を生かして、様々な史料を使って再編した感動的な日本神話の物語が必要である。

このような物語を最も必要としているのは小学生ではなく、大学生ではないだろうか。子どもたちに人間としての道徳とともに自分の国の道徳を教えるのと同じように、大学生には人間が今まで保存してきた神話遺産の中で自分の国の神話を読み考察するべきであろう。

先に述べたユヴァル・ノア・ハラリの言葉をもう一度思い出してみよう。歴史を学ぶことは歴史を繰り返すためではなく、より優れた別の方法を見つけ出すためだ。神話も、人間が社会を築くために生み出した物語として、将来の物語の担い手である若者たちに紹介することは重要ではないか。その意味で神話は大学の重要な一科目となり得る。ユヴァル・ハラリの『サピエンス全史』などの理論書を踏まえ、日本神話を世界神話の一部として大学生に紹介し考察させることは、日本神話を伝えるのに最も正しい方法ではないかと思われる。

註

(1) ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史』

(2) E. J. Michael Witzel *The Origins of World's Mythologies*, Oxford University Press, 2012.

（3）作者の名前に因んで『スノッリのエッダ』、13世紀の作品であるため『新エッダ』とも呼ばれ、詩そのものではなく詩の教本であるため『三文のエッダ』とも呼ばれるようになる。

（4）Codex Regius（『王の写本』）。17世紀に発見した人の名前に因んで『セームンドルのエッダ』と呼ばれ、古ノルド語の詩が入っているので『古エッダ』、『詩のエッダ』とも呼ばれるようになる。

（5）ユヴァル・ノア・ハラリ『ホモ・デウス』

（6）例えば、アイルランド作家であるマイケル・スコットの*Irish Myths and Legends*（日本語未訳）や児童文学の*The De Danann Tales*など。

（7）例えば、オックスフォード大学出身のケビン・クロスリー＝ホランドの『北欧神話』（1983年。同じものが『北欧神話物語』としても出版され、両方とも山室静・米原まり子共訳、青土社出版である）など。

（8）ケビン・クロスリー＝ホランド『北欧神話』山室静・米原まり子共訳、１９８３年、青土社出版、40頁。